輝く学年団を訪ねて

「じりつ」した生徒を育てるため、「あたり前」を大胆に見直す

岩手県立葛巻（くずまき）高校　3学年団

学年団が直面した課題

◎与えられたことをきちんとこなす生徒は多かったが、主体的に学習に取り組む生徒を十分に育てることができていなかった。

◎それまであたり前だと思っていた指導を見直し、生徒へのかかわり方を変えていく必要があった。

学校概要

地域連携型中高一貫校として、町内3中学校との数学及び英語の授業交流を推進。毎週、同校の数学科と英語科の教師が町内3中学校の3年生に、中学校の教師が同校の1年生に、それぞれ数学と英語の授業を行い、中学校から高校まで切れ目のない学習指導を実践している。2017年度には同校生徒を対象とした無料の町営学習塾が開校。多くの生徒が入塾しており、同校への入学を希望する理由の1つになっている。また、「くずまき山村留学生」として、全国から生徒を募集。22年度は12人の山村留学生が入学した。

設立　1948（昭和23）年
形態　全日制／普通科／共学
生徒数　1学年約50人
2021年度進路実績（現役のみ）　国公立大は、室蘭工業大、岩手大、秋田大、茨城大、長岡技術科学大などに10人が合格。私立大は、八戸工業大、東京理科大などに延べ9人が合格。短大・専門学校進学18人。就職4人。

最初の学年会議で示した「適度に手をかけない指導」への挑戦

2021年度、岩手県立葛巻高校の2学年主任と進学クラスの担任を務めることになった抱石鉄也先生は、最初の学年会議で、「じりつ（自立・自律）」への壮大なる挑戦」と題した学年の基本方針を示した（**P.34図**）。

「与えられたことをきちんとこなす生徒は多いけれども、主体的に学習に取り組める生徒は少ない。そうした状況は、これまでと同じ指導を続けていたのでは変わらないと考え、最初の学年会議で、『適度に手をかけない・世話しない・寄り添わない』という指導のスタンスを先生方に提示し、理解を求めました。今まであたり前だと思っていた指導を見直したかったのです」

週末課題を減らし、大型連休ではあえて課題を出さないことで、生徒に自分がやるべきことを考えさせたいという抱石先生の提案に、当時2学年に所属した清川頼宣先生は、身の引き締まる思いがしたという。

「極端な言い方をすれば、本校の指導は、生徒が受け身であることを前提に、教師が一生懸命手をかけるというものでした。これまでの与える指導は、短期的には効果があるけれども、変化の激しい時代を生きる生徒のためにはならないのではないか。抱石先生の提案を聞きながら、自分自身の生徒へのかかわり方を改めて考え、変えていく大きなチャンスになりそうだと思いました」

「じりつ」というキーワードは、「じりつした学び」「じりつした学校行事」などと、各時期の生徒の状況に合わせる形で、学年集会などで発信されるようになった。また、毎月発行される学年通信でも、「じりつ」というメッセージが繰り返し発信された。その際、指導スタイルの大胆な変化を、生徒が確実に理解するように配慮したと、学年通信の製作責任者である島田政美先生は振り返る。

「抱石先生は、学年集会などの生徒と向き合う場で、『じりつ』というメッセージを、パワフルな言葉とともに情熱的に発信していました。そこで、学年通信では、抱石先生が使った言葉とは違う表現で同じメッセージを伝えることを通じて、学年主任の思いは学年団全体の思いでもあることを生徒に伝えたいと考えました」

島田先生は、それまでの学年通信であたり前のように掲載されていた定期考査の教科別の平均点などに代えて、学年団の教師によるエッセーを月替わりで掲載。紙面の大半を、「じりつ」を願う教師の思いや、「じりつ」に向けて生徒と同じようにもがいた教師の思い

リーダーに聞く！5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか？

A 改まった会議ではなく、日々の雑談で物事が決まるチームです。様々な企画が、職員室での雑談の中で生まれています。

Q リーダーとして心がけていることは？

A 何かに取り組む時に、最良と最悪を想定して準備・計画することです。生徒、そして学年の先生方には、最良の状態に至った時のワクワク感を伝えて、アクティブになってもらい、一方で私は、「もしも」の時に備えるようにしています。

Q 学年団としての「成功」は？

A 生徒が自立・自律することです。今まさに、それが実現していると感じています。

Q リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A 学校によくある暗黙のルール、慣習を変える力です。あくまでも、生徒にとって価値があるかどうかで物事を判断しています。

Q リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A 改革を進める際、校内でのビジョンの共有が不十分な時があると自覚しています。同じ思いを持つ先生方が、私とは違うアプローチで周りに説明するなど、サポートをしてくださるので、とても感謝しています。

出で埋めるようにした。そのようにして、学年団として一番大切にしたいメッセージを、学年団の教師全員の言葉で生徒に伝えた。

自ら学ぼうとする意志を育むため、ユニークな新企画を次々に実現

与える指導を減らす一方で、抱石先生は、「ジュエリープロジェクト」を企画した。それは、進学クラスの上位者を選抜し、週1回、放課後の30分間を使って、国公立大学の個別学力検査の問題のような、高度な思考力を問う国語・数学・英語の問題に生徒が協働して取り組む企画で、学びの楽しさを味わわせながら生徒の力を磨き、光らせたいという思いをプロジェクト名に込めた。

21年度のジュエリープロジェクトで、数学の作問を担当した鳥海貴広先生は、毎週1回、チームになって難問に向き合うことで、生徒は学びに対する自信を深めていったと語る。

「学力は高いのに、自分の考えを表現することに自信を持てていない者もいます。そうした生徒が、仲間と一緒に問題に取り組むことを繰り返す中で、主体的に考え、自分の意見を表現する力を身につけていきました」

同プロジェクトの翌日に、生徒たちが問題について引き続き議論する姿も見られるようになるなど、生徒の変化を感じた鳥海先生だが、「深い思考を求める問題を作ることを通じて、生徒だけでなく教師の私の力も磨かれた」と、率直に語る。

同プロジェクトは、就職クラスにも影響を与えた。2年生の就職クラスの副担任を務めた椛沢和歌先生は、「職員室での雑談から、新たなプロジェクトが始まった」と話す。

「ジュエリープロジェクトでの生徒の輝きを見て、学年団の先生たちと、『就職クラスでも何かしたいね』といった話をする中で、資格取得を通して生徒がそれぞれの花を咲かせる、『フラワープロジェクト』の企画が生まれました。6人の生徒を選抜し、1月の全商簿記検定3級、翌年6月の同2級の取得に向けて切磋琢磨させたところ、3級全員合格、2級1人合格という成果を上げました」

就職クラスの生徒の活躍が進学クラスの生徒の刺激になると考えた学年団は、就職クラスの生徒が講師になって進学クラスの生徒に簿記を教える授業を開催した。

「進学クラスの生徒の中には、起業を志す者もいますから、簿記や会計を学ぶことは、進路を考える上でも意味があります。普段おとなしい生徒が生き生きと簿記を教える姿は印象的で、進学クラスの生徒だけではなく、普通教科の先生にとっても、簿記という分野に出合えたことは、実社会について考える機会となりました」（椛沢先生）

進路を主体的に考えるために社会に対する視野を広げる試みとして、新聞記事を活用した「朝学習Sophia」も始めた。週3回、学年団の教師が分担して新聞記事を選び、内容理解・要約・意見論述を求めるプリントを作成して、生徒に取り組ませている。国語科の三船秀樹先生は、取り組みのねらいを、「小論文対策でもあり、生徒と教師がともに学ぶ雰囲気づくりでもある」と説明する。

「抱石先生は、内容理解・要約・意見論述を求めるだけでなく、『私は今、こう考える

図　最初の学年会議での学年主任の発信

R3年度葛巻高校2学年　学年長基本方針（たたき台）

文責：抱石鉄也

[個人の5カ年計画]　葛巻高校をSGLHに

（Super GLocal Highschool　スーパーグローカルハイスクール）

[R2年度入学生　R3年度テーマ]

～「じりつ（自立・自律）」への壮大なる挑戦～

【生活・学習について】　適度に手をかけない・世話しない・寄り添わない
・服装、あいさつについてのコンセンサス
・朝学習について　抱石案：監督つけない　（自立・自律への挑戦　時々ゲリラ監督）
・週末課題について　適量（＝これだけ？と生徒が思う量）を月曜日　朝厳守
・GW課題について　提出を義務づける課題は全教科出さない。
　＊スタディーサポート活用book（4/22配布）も提出を義務づけない
　＊ただし、休み明けのスタディーサポートの「結果」で評価・指導・面談する。

それまでの同校の指導の軸とも言えた「生徒に一生懸命手をかける指導」から、「適度に手をかけない指導」へと明確な転換を求めた。そして、生徒が自ら勉強したくなるような新たな指導が、その後次々と仕かけられた。

※学校資料をそのまま掲載。

3学年主任・担任・進路指導部
抱石鉄也 だきいし・てつや
教職歴26年。同校に赴任して2年目。英語科。

3学年副主任・担任・生徒指導部
鳥海貴広 ちょうかい・たかひろ
教職歴11年。同校に赴任して6年目。数学科。

3学年副担任・保健厚生主任
三船秀樹 みふね・ひでき
教職歴24年。同校に赴任して2年目。国語科。

3学年副担任・総務部副部長
島田政美 しまだ・まさみ
教職歴20年。同校に赴任して3年目。家庭科。

1学年主任（21年度2学年副担任）
椛沢和歌 かばさわ・わか
教職歴26年。同校に赴任して2年目。商業科。

教務主任（21年度2学年所属）
清川頼宣 きよかわ・よりのぶ
教職歴9年。同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科。

けど、高校生の頃は、こんな考えだった』などという教師の自己開示や、記事の内容からもう一歩踏み込んだ問いかけをプリントに加えて、生徒に熟考を促していました。ほかの先生方も、抱石先生の工夫に倣うようになり、皆が楽しみながらプリントを作成しています。生徒の朝学習後、職員室で学年団の先生方が、プリントで取り上げた新聞記事について自分の考えを語り合うこともよくあります」

生徒の「じりつ」を促す過程で、教師も「じりつ」を果たす

3年生に進級した生徒たちには、少しずつ変化が見られている。

「2年次の12月から、生徒には、その時点での志望校に対する志望理由書を書かせるとともに、受験勉強における『じりつ』として、その大学に合格するための具体的な学習計画を作成し、それを担任にプレゼンすることを課しています。そのプレゼンに合格すると、受験勉強をサポートする担当教師が決まり、本格的な対策が始まります。今年度の3年生は1学期のうちに学習計画を立案し、主体的に学習に取り組んでいます」（抱石先生）

前例をただ踏襲するのではなく、生徒に合った企画も次々と打ち出す学年主任と、それを生徒とともに楽しむ学年団の教師たち。島田先生は、『何でもやってみよう』という雰囲気が学年団の中に満ちている」と語る。

「生徒のために何ができるのか、自分の考えを遠慮なく言える学年団です。教師同士が本音で話し合ってから生徒に向き合うので、生徒も、教師を選んで態度を変えることはなく、どの教師の言葉にも耳を傾けています」

「生徒には学校生活を楽しんでほしいですし、たくさん学んでほしい。そのためには、私たちも楽しみ、学ばないと」と、抱石先生。「じりつ」を目指した生徒と教師の学校生活はまだまだ続いていく。

学年団 輝きのポイント

- 学年団として一番大切にしたいメッセージを、学年団の教師全員の言葉で生徒に伝えた。
- 教師間の対話・雑談を大切にしてきたことで、互いの取り組みや考えから刺激を受け、新たな挑戦を楽しむ雰囲気が醸成された。